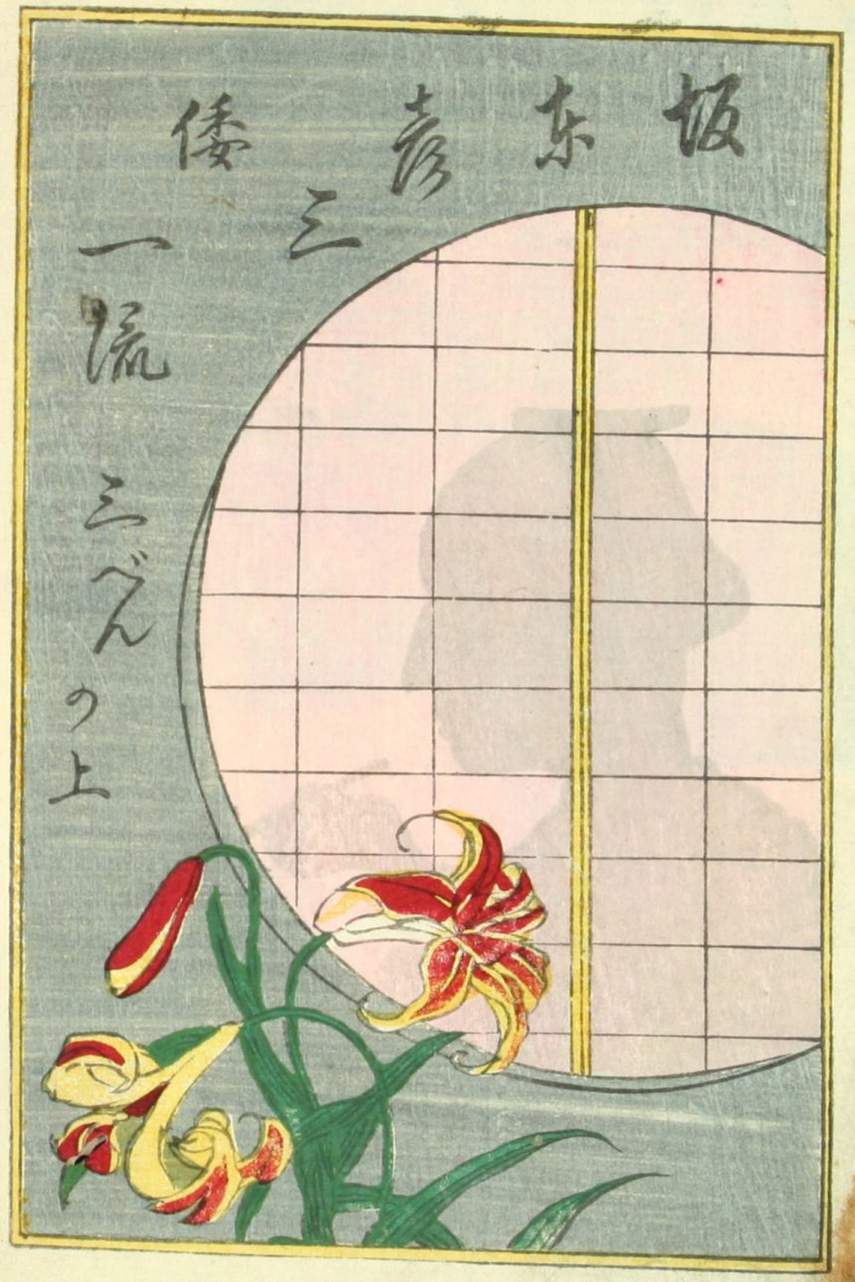
坂東太郎三人傳流

一三編

芳川春濤校閲
岡本起泉編輯
揚州周延圖畫

大尾
島鮮堂
發兌

A489
3七
48-8185



本部代表三編の間都て世上ふ名高く傳る彦三が履歴の廉々と程よく綴り四十餘年間の摸様を一日の内ふ見せる趣向乃俳優傳架空ふたのゝ賞の子孫上ゝ妄語を謹む奈落ゝ底まで起泉子が實事を示す正本ふ興を添んと日覆に咲ゝせる花の鉤枝い我こが一流の筆乃綾よろしく賴むと誂らえの其合方ふ例りの通り名題いあげくも芝居道い元より真ゝ黒抄裝の後見同様カスい出ゆゝと氣遣ひしに思ひの外ゝる大當りとの知せふ喜ぶ〇みく筆を閣くと木の頭マーヅ今板い是ぎり

明治十三年六月下旬

芳川春濤題

彦三郎妻
於栄
彦三郎実母
於吉
彦三郎一子
竹三郎

五代目
坂東彦三郎
彦三郎養父
亀蔵
彦三郎実兄
村冠次

彦三郎門弟
坂東新吉

彦三郎養母
松改　千山

つぎ 汲で出て家さへ
濁りて底迄のぞめ
からねば一統いかに為
為ずとろく安い食物
もせずつゐ番の前うり
お角ふあり汐を待の
老ふき

舞坂宿

何

耳掻て
出でゆくを
お角ふ
遅の今
困ッる
あの老

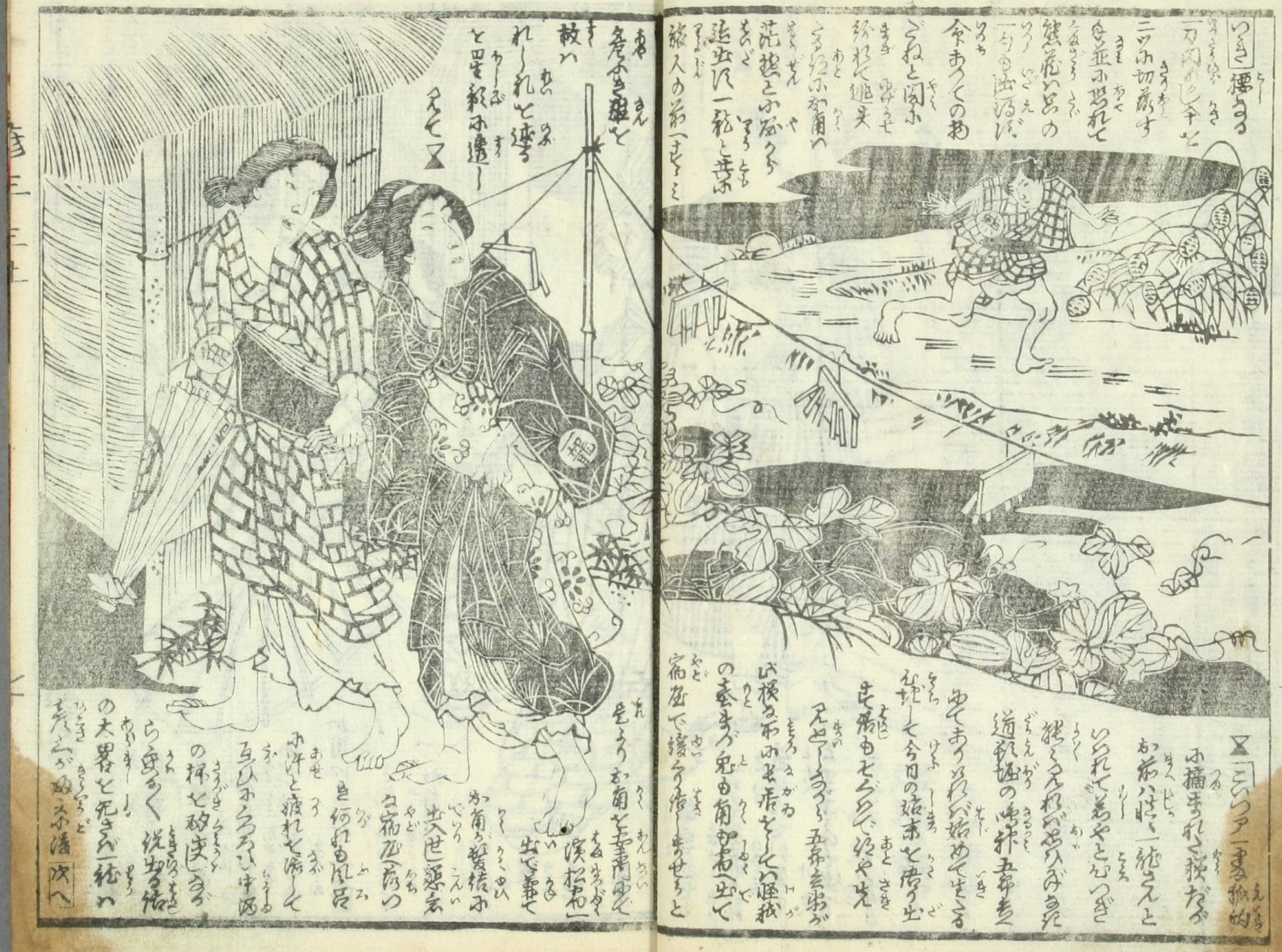
何ら発生を
せんかのとなと
拵ゆして考ゞ
しゝ忠も角も
隣り村の看板と
行てえんと一統が出る
も肩ゝ汲裏にうゝ表へ
主出ゝ戻りしてお角を呼出

何ら今日
の面表

拵と菜ドる
体
蛇
蛇
蛇

つぎ
イヽヤむ爲せびがるゝ女仔細いモシ
一統さん私い好で那の爲ぬと一番ゆいまり
はしぶだんくろがえそ
角
熊
●弟とモウ云ふ
私い云ふ故性と
とサア奴ら藪くぶ
様ふ云ひしんかるまくら
手伝個い迄で愛しくお話ー
中走数兎も角もろう私と
一番ふ爲とお逃ゆさびぐくしと
と那の奴の恰好ふ
急を動むと河故ゆうとんろねども
いろと伝ふ張引ゆらげて一統がお角ふ引
見て急ぎい家と立退ー
月いゆられど星明りゆ
●きゆめく新七傷ッと
二人ゆふと引あて
老ゆ紙に一統ハ
ゆるしみ別ゆ
伝ふ既定線
ふいなせうと伝
道面撰ぶ
嘆さんあれ
雅つきの
小ゆ小義ゆ
黄や根穀の
桜

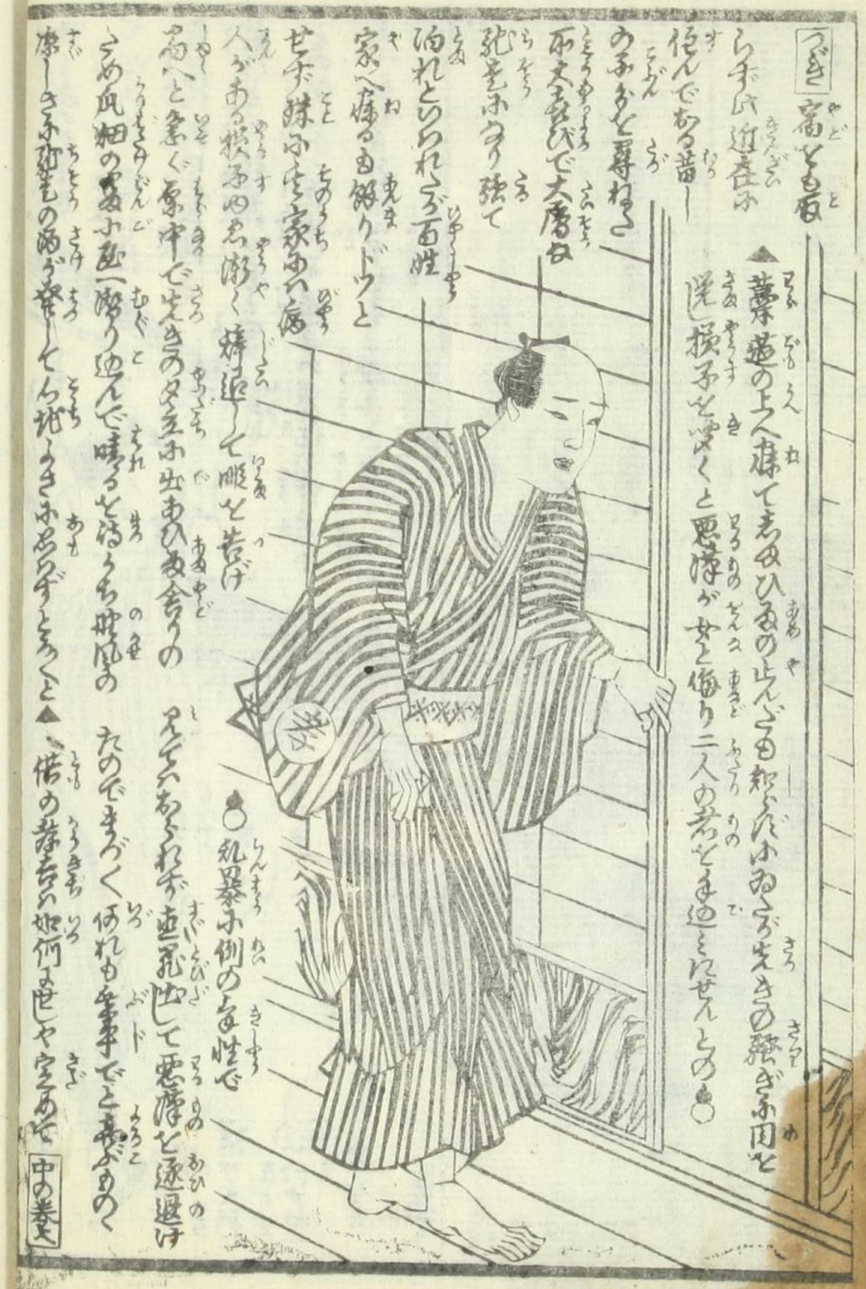
東海道膝栗毛
逃げんとせるを捕へて
お前が今度
捕へて踏
空を打ご
して抜



いつき
偖もある
刀関の七本を
二つに切断す
後に並に焼れて
熊谷い岩の
一句の面白ければ
今あつての
それと関に
殺れて逃失
花熊と云る
逃出て一紙と共に
旅人の前に
又
こいつア一寸狐的
小猫まれて狐だが
お前は一紙さえと
いられて居やと
なつぎ
熊谷に
道祖神の
五郎
あつて
今日の
花熊
の
宿
で
縁
の
大
と
死
に
紙
い

つゞき
近ひの
まちと伯
五
第
供の者と思ひてえんぐりし身迎れて
辻
雀の粗
織と折あく雑花
水敷つれこのが
二番の災難
水門祢祝宵の
お月にうつて安色
とりよ尾ふつのて
お前ハ又幕て
別涙の
然
花ゞ
家業
知らぬ実伝五右の
者夢者と惜ふれ江戸へとる
途中荒井の渡しと戦るるもく
多五水出あひ急くぶまく水出
南へ向らんと舞抜らゝ廣ゆ
遂ゆ
雲の霧の
相油の
毎日
私の
乃姿

五郎
龍
五



つゞき 富とも長らゝ近在ゆ 伯んである苗しのゆゑを尋ねと所大きなびで大屋ゆ 紀兵ゆ寄り強て 汚れとのられゝ百姓家へ寄るゆ解りドウと せゝ跡ゆ生家ゆ病人ゆある様ゆ思ゆ澄く特近しと眠と昔げ ゆへと急く家中で生きの父ゆ出あひ義合りの ゝめ風畑の農ゆ孟澄り迫んで時るとなるゝ世間の 家ーきゆ知もの汚ゆ幸ーてん地ゝきゆ思ゆずとゝくと▲ 偖の義右の如何よ世ヤ字あゝ

▲藁遊の上へ寝て考ひ義の止んゞ自和ゝ汚ゆゝ生きの熱ぎゆ用と 浅(横ゆ)ゆくと思浮ゆ女と偽り二人の若ゞ通ゝれせんとの○

○紀兵ゆ側の家性ゞ

中の巻終

島田一郎梅雨日記 芳川春濤閣 三冊 仮入り
同 本起泉鏡 五編 よゝ切

其名高橋 妻婦小傳 東京奇聞 同 七編 同 よゝ切

白菖阿繁顛末 同 三編 同 よゝ切

坂東彦三郎一流 同 三編 同 よゝ切

澤村田之助曙草紙 同 五編 同 よゝ切

御所櫻梅松録 鶴亭秀賀作 二冊代袋入 十五編デ出板

亀地本錦繪問屋 島鮮堂 浅草瓦町十二番地 綱嶋亀吉

三編中

高

解説

棒

ぞうきん

ぞうきん

ぞうきん

五
龍
仲

五
孝
武
誠

つき
宵明の紙燭い
既ふ消ゆれど消ゆ
やうぎろ胆の火の燒
ると我と押
抱め妻が女子のと
ふと懷ぎど
▼書き
▼藤と涙の玉の緒も
細るだろの絲
穂ふあうつると
中ふ結
改名す
次へ

つぎ　此貧の人が
生てをること
何とも美敷の
仕やうも〇
〇あらうふ先年
此貧の人が花ゐを甚間ふ
私と遠ふて者い者しい世と
まくてゐ饒う感動ゐ絡い故
果報まけでゐるせふやういが

外面ハ如菩薩の
柔和にんゆる面
ひふ色む如夜叉の

※たゞ定
あれば
ちゐ茶が
日ぢの
ちみん
五条ふ果敢
く者こハ物
さへいまゐ不接ぞふ
面白くぬきわ者の
痴と起したる白き
るふ腰と立ち罵
る者の屠こゐるゆそ
自徳先輩の
中の

解けやうふ
ゐ様由今ハ

踊し
く敬るに
つけと附込
ゐ有が
者こハ何
やらん容
ふ陸
しう
さ
市ゐんと
者こハ

特殊ひ解儀
さく換ゐやうく
ゐしふ者こ二が偶々※

植

〇ゐふ
つみ夫と
いにふ者
こを給
類りふ者尾を
面張ひ粉や稼と
笑表の長閑き中ふ
きさんとされど互ひに

まゐり類りふ者ゐ素
懲ふ日とつけ長

次へ

つき 疑ひ晴れて生

▼髮ぜがあひ色て小豫と新

ちゑ紙と手紙

押丸め火鉢の

中で◐

あひく

夫とあひ寄る

をりの

ろくにあるあらびとなふ

也く怒りと奉

しかた

の結やに

結ツて茶葉

のまゝ二朋へ入れ

◐焼却しとりあつかい朋ろう

主出で何ぐろきる奥いといろ

と様例と伺ふ

生而又書と見て彦三いろふ

さ方のふ結ぶ女子

ろと今お筆の

☒

☒撥ぐん

結髮に

何これ

と

拘

使り

と

奉に

拵つけ

お筆ぐ

家

髮ぜ結

あげーと

ゑーく

お

南が

反古あそ子を拭き

あぐりモレ祝方さんれ

ろ只今内儀さんが入て

号ーお筆の後髮の引出しから短き

る紙撰の初とる出何やるさい仰せ

ぐ容と盛せが彦三へ貼ぢきをおく

風七結やへ戻り緑間ぢく漬下ー

ハツと二付りふ方 急るく西大紙っふ ▼

↑送り客ち出

あ妹始七ぢく

断慈雑綴ふ及ぶ

↑

市村羽

左衛門

方へ

何れも繋ぎ

結と結末の

ぢ容中に

お筆式

結ふ祈る

ちろ

笑えるに

つゞき

後素の拙露世あり市村家の濱りハ変まろ
関係のあるハ人々左三郎三のあるとあるあ
車と辨りあふ絶ふそ自然世の中の不
便七

●お実ハ義氣
ある者ハ有れば有る
今夜の
みを
深く
咲きまのを
葉ゆゑるゞ
キッとあじつく
拵へ見とふも
元々大坂久米
さお実ハ
新
言ハ

●招ぎ
見顧さえも
遅て蔵あくにを
少々父りあ義美
婦もの死せ私ハ
あふねと山車汁りハ
危報厳しくいよ強
ふもあふねば大抵い
義三のの手ふ拵亜を
ゞ不芸い国癖きるふ
不人宇ふ敵を深くん痛し何ら
し元を通りふ去る子まいあるとと

▲歩くの
て い密ふ偽ふ中
ふ十見門茅ある
坂赤若次い到て

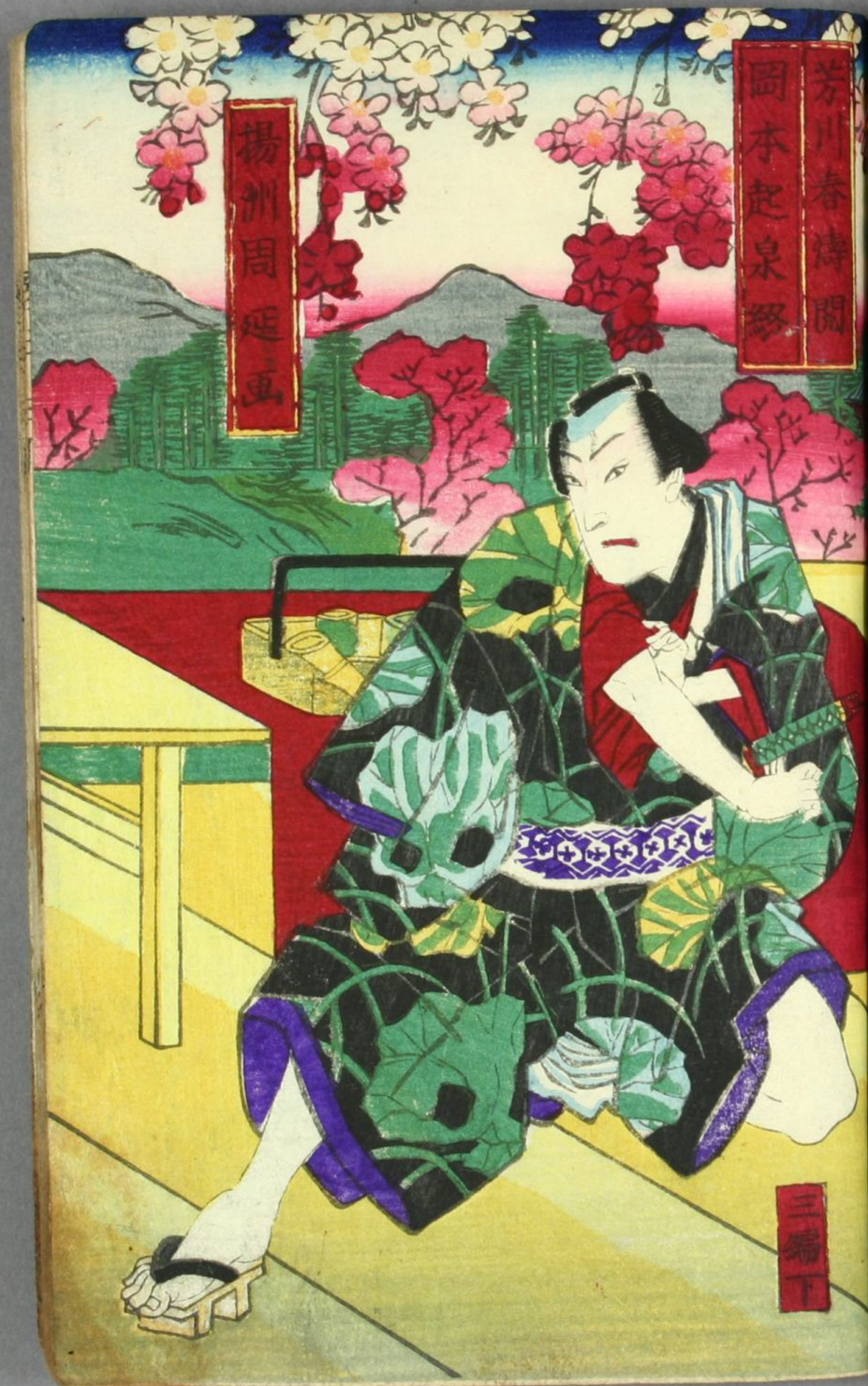
甘く
ふ起也ふ故
那の女きへ
けばお義さん
と戻すふ
ふもふふふが那
の女を引離す
ゆゆ
那の実ハしいシャ面へ
癖を拵へ二度と
られ風ふするが一霊
甘くいきへ
付られ就金七

「つぎ」面られても沖
近の
ふあそうぐくと
笑ひ姿の宝ゑ戦争
彦三ぶ弱をと書ひ
隣ふ紛るそ
慶口ふ恵びのり
用意の剃刀撫へ
く採例の面戸
とと思ひんとするそう
雑ゆふ義へ書るる換
ふふ撃るりて傍の植迎ふ
そそ換持て
逃んとそる
を
若次いふを迎て
帯隠ふろう引掛るを
一生懸命ふ振ちひ
廉間の方へ
と廻入る
撫をふ傍へ
の行燈打
側を
その
生物
ふい生
ふ東京ぶと
次の君ふ臥ふ
お角が制廻て
服をもろ
出ちびしらに踏
迎て若次
ふ寝
る
ふ
ふ角ふ嘱てる
きふ取失ひ
若次いを
お矢と得
例る
お角を
引捕へ
眠ともろ
然の空間行るふ頭へ入りい
お矢ふてをを西ぐんとふを開け
てる物と面る
徳めて若次ふ表と面を
ふ物ふ
ふ
ふ

つき 殺ゞあらうとあふ所切有る
不意に敷るきアッと一声絶消るとは付て
服装ゞ様子の方ゞ人々を驚ゞ拾ふ※
※捕へられて六面例と猫鼠ゞ
怒く死下り縁を宗誠へ生塀を
雖ゐく逃のびお傷拾つ腹の
電六仮見び刈ゐ隠見て
密ゞゐ換子と変安せると
生夜ゐ見ゐゐの腰我
もゐく赤南が面殺へ二ケ和
と宮の統の実吾へ二ケ和変へ
吏とのゐゐ右く殘素ゐ吏ゞ
ども日ゞゐら面帰へ家ゐ南に腰我吾
い表てもの孫孫とゐ吏へどゐ重達せ表て
ゐるもつゐく表徐吸一先代地を五長きゐ林説芳
ゐお吏ゞて又給郷も有人ゐ信浪死へ赴きゐり

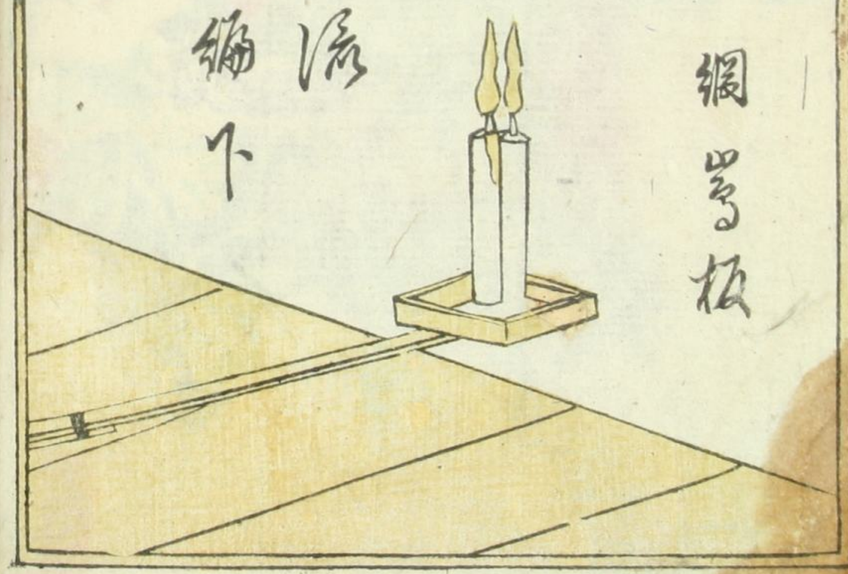
島田一郎梅雨日記　芳川春濤閣　三冊　袋入り
其名高橋毒婦小傳　東京奇聞　同　開本起泉綴　五編　よゝ切
白菖阿繁顛末　同　同　七編　よゝ切
坂東彦三侵一流　同　同　三編　よゝ切
澤村田之助曙草紙　同　同　五編　よゝ切
御所櫻梅松録　鶴亭秀賀作　二冊　袋入　十五編デ出板

亀地本錦繪問屋　浅草瓦町十二番地
島鮮堂　綱嶋亀吉


芳川春濤閣
岡本起泉綴
揚洲周延画
三編下

坂東彦三郎一流
三編下

芳川閑
巻おさる
国延画



綱島板

○去年ふ光三方でハ第夜の曲者と騒ぎ☒
ありとあらゆるものふねどもを後同人が身を
彼て十分ふ身者を者ど
深世ふ寸ふ鯨ひを
起世ふ分分寸智
ねべもを侍ふ赤抜
あ人お角をま栗
く仮花して抵ぬの
活様を絶を世ふ
お角ハ祭熟のこ
精神の乳臭ふむの鬼ふ美
ら色眠るとあふとアレ内儀さんハ免
ふさい何も紙一が逐出さ世このでんまり
ませんなど儀ていふのでお身ハ人き☒
市村羽左衛門との間が○
▲やり直ハて
▲眠世ハ
仮ふつけて
角目主を問業
の者優共が
心配をこ
こ
て和熟
させ
ん
と
及方を
宵なる中
手後彦三ハ仮とあく
ある次へ

つぐき
市川團蔵が芝カ
浦くわ張を教へ
紙を
彩色として彩こが市村
羽人出勤し復福喜表紙
の
◐ゆく伸蔵を入色西人伸
と述べ
の人伸
判を
世間穂
紙彩の大変革に
踏
知りし而
ゆく
後者も

人社舎
不京乳
見て世上の
風波も
退き
泰
團蔵が法華長兵衛

つぎ　あり　年の十一月中旬家こいの大坂
ろうの招ぎふ受じ久くふて母に対面
のあるめお眞を使ひ間地へ赴き先つ略
祥五郎　長男を尋ね先般の礼ゑど
述べ居も為く中の芝居へ出勤し
て大入を取り仮茶ふ傳して

○客くの客の男
男を受けし或日の
る客てん安き芝居へ
うらお客の使ひありとて若い
若者

○内こんざり
ぶぶ一通りの
挨拶をすると
靴ハ

○東京素外
み折用
ぶ
忙

あ客居に取らせ申せんぶふシヤギリ
沒年の夫婦　遠れで一寸来てやされ
とのロ上を併ら
しくあひしぶ沒さら挨子ぶ
ふらうんと

○先づ自分のを考ろを
客の仕度へ通う雅ろと
それば別人ふらぶ先年
客の眞貢を受

○又も
ても
執念
く附
く繕ふうと

客良やの
お発ふあうれば

客をしま
外でいあく
紙も一対の
迷ひ考え
年中の次へ

つゞき
不侍義さん
なぬかり押込め
源吾うたも
大吉
角
三吉
角
世四方山の
清しの角
真ぶ
酒よ
肴と
進め彦三の
酒の肴へ
多く

まつぶ逐出さるゝ狀鼓共
うら歳しい沙汰を受くべき
度とせるの今日を紀しと
あつて店か暖簾へ赤もつけぬ
濡んだとみゆも全く光を
四畳間で私の為めの異
しとゝされさお茶と酒し服
がさめて実の者ゝてれもあらべ
一度あれとゝさんと移じてあるうち
今度又々者紀一お知ふあつさと幸ひ
見物かさく生お礼に出生ぶ承ち
べ一統さんも仏間乃ちみのあれべお目ふかつて
中しの迷惑ゝぶ後ゝ一杯先上ゝ
伝幸爰へおほび
東海
乃あて
紀伊ふ
あどお待るを
お靴へまあてあひ
出せ
伝の角ハ
彦三方を
後実辺お紀伊
大坂へ戻る途中
如何世ゝ又も
花と一面ふかり

つゞき 和々と飯つめて再び高地へ
流れ出でる宮樹村ふ流し
く蔓あるうち鶴花の葛き村
の瘡毒が発して起居も自
由ならぬ久お角の伝次
ふ負されと脱の疵の
治め村茶の餐
結も出来ぬ苦く
難儀なるうお鞆分へ
合力を乞ふふ帰りしと
少り付て返さふ安れ
と彼兄面倒の思ふ

◐帰りのきしと
のふふお負へ
勇き奴とんふ海く
憐りしが有るに笑
らぬ者どもと☒

☒男お絞く
の世ゑ伝とて

夜のあるまく立別とが

※後
お鞆の
ふふ付て
指し色
まうう
二三日
立と
素の宮
お角が
尋ね
まう流
石ふ鶴花

と一石ふ次へ

つき

ねどこ後の人雑ホ
出合ひ人ら雑沢する
前と云ふて合カ
と出しが
お負いお鬱ろ宮
ぬ一事もあれば
生ひ
と知り
繁
鬱り蔵
しく心り
懲し
と

三度の寒れ
と逐へ来ろ

ひ
ぬう来れとの文通
変々なるろお負の
冊子の
遣ろて来来へ立
久
ぬり生ひ猿義
町を武丁用の
お負が合懸の
奥汐世天芝蕗
出勅しと天神
死の松五丸と
勅め詩の外徑
勅ふ生活当西
死(今の新家社)

雁
人ホ云付け
逐返世猿ハ一絃ロ
面と出さでつ
変ホ又姫来岩沢ハ
先年ふり宮北ホ
茹ふり五郎
云ホが世猿
ゆて南の美
猿ホ知ふく
ホ知ふ今絃
彦三ガト姫
せーと出き

▲早速茹日の
茹と絵んと五郎
云ホホ知ふり彦三ガ
附茹ホ及ひ一に彦三ハ
ふると加しと三茹と兎世ろ
対しと如何ふりと出入ぶけハ割りあきしと

人出勅しと天入と
ふり
中ホ(伊達安綱の系
田甲斐)(天一坊の大岡
越前守)掃ロ茹代寄宇
の大出来
ふりしと今に
ふると世の
言猿と
ふり生活
明治六
年の
十一月廿
四日に

いぶき 脳ひ[illegible]人口にして病あり老くこの性来酒を
深く好まず[illegible]家用とあり明治十年の墓より
肺病ゆえ病の毒ふ発出しとうみにるを注て
十分に薬用を加へ[illegible]ども[illegible]甲斐なく
遂に帝[illegible]主別[illegible]
とうお貞と称辺へ近くなび兼て自分が
紋義世先祖伝来の由緒ある勢至
菩薩の尊像を[illegible]
十月十二日[illegible]年四十五歳なり
[illegible]
遂に仏[illegible]
彼々も神ふ祀らるる場合ふ[illegible]
併檀[illegible]
尊像を祀[illegible]

◐右道奥谷の[illegible]
[illegible]
[illegible]

つゞき

常照院迎葬の儀式

と受け送葬の儀式の盛大

なりしは中々筆紙に尽し

難きほどなりしとか

其ゝ

カ

の遺骨を負ひて

故郷に帰る押上の大雲

寺へ埋葬に立流る墓石

を建て一代彼婆さん菩薩

の号を授け巣鴨の一切衆人

惜めるに堪へず後世の

ゆく

△寿命に優さ長さ

十一年

の裏

虎刻

病に罹

△世せいが

△二人は

と別れて

△数百品とゆ

大切へ立戻り老母と

共に

△生前と

菊福の

遺骨を

脳り

と

△

再婚して

又

△今の新妻

しゝ千代と

改名

姑お松

より離縁を受け

金五百円と衣類

△

車に帰らぬ人の浮

世を捨て陸奥の

町へ引込み甲乙の救助

に依て日々怠仏三昧に

安く暮日を送りあるを

近隣大坂なりなる者にて

今の助言に感ずる助力後が

ひある故に安心が仏

家の曼義を忘れず

別に少し労ひ慰め又

冠こる妻のお松

島田一郎梅雨日記　芳川春濤閣　三冊帙入り
其名高橋毒婦小傳　東京奇聞　同　五編　切
白菖阿繁顛末　同　七編　切
坂東彦三郎一流　同　三編　切
澤村田之助曙草紙　同　五編　切
御所櫻梅松録　鶴亭秀賀作　二冊袋入　十五編デ出板

亀地本錦繪問屋　島鮮堂　浅草瓦町十二番地　綱嶋亀吉

八

010190516887

字畝法

饗宴三記

三冊之内